

# 日本におけるチベット学の芽生え、発展と現状

陶 雲 静\*

## 1. はじめに

チベットの政治、社会、経済、歴史、文学、言葉、文化、宗教などを総合的に研究する学問チベット学は、今や国際的な関心を集めるホットな学科となっている。グローバル化が進んでいる現在、国内外の交流のチャンスが多くなり、他の国の研究方法、研究成果を学ぶことによって中国のチベット学の全面的発展をより良く推し進められることであろう。

諸外国の中、日本のチベット学はとて参考の意義と価値があると思われる。日本が一番早くチベット学の研究を始めた国の一つであり、豊かなチベット語文献を有する。研究機構も整備され、チベット研究において多大な発展と実り豊かな成果を取っており、この分野では世界の先頭に立っていると言える。

本文はそういった日本のチベット学研究の発展の脈絡を整理し、今の状況を調べ、その発展の特徴を分析する。それを基礎に、中国のチベット学研究に対する啓発を考え、これから両国の協力によるチベット学研究の可能性を探っていきたい。

## 2. 日本のチベット学の芽生え

日本における一番最初のチベットに関する記録は8世紀の史書『続日本記』巻19、孝謙天皇天平勝宝6年正月丙寅条の遣唐副使大伴宿弥古麻呂の

帰朝報告に見られる。座席の調整や吐蕃と向かいあって最上位に座ったという話である。また、平安末期に日本に伝わっていた地図にチベット語と対応する中国語が表記されている。それ以外、チベットに関する情報はなかった。

その状況が江戸時代まで続き、江戸時代に入り、幕臣近藤重蔵（1771～1829）が中国語の文献を元に、「喇嘛考」といった文章を書いた。ダライ喇嘛とバンチェン喇嘛の区別や黄教と紅教の区別などの内容が紹介されている。この文書は中国の文献を参考にして書かれたとは言え、日本がチベットに関心を向け始める代表的な文章である。これを日本のチベット学の芽生えと見なしてよからう。

明治時代になると、日清戦争や日露戦争をきっかけに日本はアジアの動きにも目を向け始めた。日本の陸軍が大陸に関する情報を収集し始めると同時に、日本の東本願寺も僧侶を中国に派遣し、積極的に中国の仏教に関する情報などを探し、チベット仏教の高僧との接触を試みた。そういった中、小栗栖香頂（1831～1905）という名の東本願寺の僧侶が1873年に一人で中国の北京に赴き、中国語を勉強しながら、中国の仏教状況を調べた。小栗栖は五台山の高僧を訪ね、会話を試みた。北京で調べた仏教状況や辺境の人たちの多くがチベット仏教を信じているという状況を土台に、清の思想家魏源の『聖武記』、釈年常『仏祖歴代通載』などを参考とし、自分の見解を『喇嘛教沿革』にまとめた。この本は日本における本格的なチベット仏教を研究する本である。

以上をまとめると、日本のチベット学は19世

\*北京外国語大学北京日本学研究センター・院生

紀に芽生え、仏教研究から始め、中国語文献を研究の基礎とするということが分かる。

### 3. 日本チベット学の発展（20世紀始めから20世紀末まで）

#### 3.1 文献の収集と整理

19世紀の末、欧米の仏教研究が長足の発展を遂げた。多くの欧米学者が釈迦の言葉により近いパーリ語と梵語の仏教教典を使って研究を展開し、多大な成果を取得した。しかし、日本仏教の使っていた仏典はすべて漢訳のものであった。これで日本仏教界は強い危機感を感じ始め、チベットに関心を向け始めた。チベットに仏教教典の集大成があり、インドでは無くなっていた仏教経典も存在するかもしれない。この仏教者のチベットに対する関心はのちに「入藏熱」と呼ばれる。

日本の仏教を振興させ、仏教教典を探すという目的を抱いてチベットを目指した日本人は能海寛、寺本婉雅、河口慧海、青木文教、多田等観などの人物が挙げられる。彼らはチベットから教典を収集し、文物や動植物の標本を集め、チベットの社会、政治、経済、文化などさまざまな面のことを記録に残した。日本に帰ってからも弟子を養成し、文献の整理と翻訳に身を捧げ、チベット語の講座を開設するなど、日本のチベット学の発展のためにしっかりとした基礎を築き上げた。

その他、この時期に成立した大谷探検隊も中国の河西走廊周辺で資料を集め、中にはチベット古代の文献と文物が含まれている。

以上のような仏教界の動きの他、1984年の日清戦争、1900年の義和団事件、1904年の日露戦争、1907年の英清条約、1914年の第一次世界大戦など、19世紀末から20世紀初この時期は、世界情勢が大きく変わり、中国も日本も劇変を迎えていた時期であった。日本の外務省や軍部も中国のチベットに目を向け始めた。この時期に情報

の収集を目的にチベットに入った人物に成田安輝、矢島保治郎、野本甚蔵、木村肥佐生、西川一三がいる。政府の為に働いたとは言え、彼らは日本に帰国してから、チベット遊記を書き、当時のチベットの風土や状況を記録し、実地調査の貴重な資料となっている。

上述したようなしっかりした資料収集のおかげで、日本チベット学は速やかに発展した。収集してきた文献を整理、紹介し、チベット文献の価値を分析し、チベット仏教を日本の紹介することがこの時期のチベット研究の特徴である。

#### 3.2 専門研究の展開

文献の基礎をもとに、日本チベット学の中の仏教学、歴史学、言語学などの専門研究が徐々に展開された。仏教研究は前段階の紹介から具体的な宗派研究に変わり、密教、ボン教の研究が現れてきた。歴史学の研究はチベットの古代史と中世史の研究を主としていた。代表的人物に山口瑞鳳と佐藤長が挙げられる。言語学の研究は主に辞典の編纂やチベット語の教科書の編集に力を入れている。例えば星実千代のチベット口語教材など。その他、川喜田二郎、高山龍三などの方が実地調査を展開し、第二次文献収集の幕を開けた。一部の大学、研究機構は登山や考察隊の名義でチベット文献を収集、購買した。

### 4. 日本チベット学の現状

前段階と比べると、この時期のチベット学はより専門化したといえよう。言語学と歴史学の発展が少し衰え、仏教研究がより深くなった。またチベット文献のコンピューター化処理がこの時期の舞台に登った。中国学者と協力して、中国境内のチベット民族の関する研究を展開するなど、国境を跨ぐ研究も展開されている。

#### 4.1 現在の日本チベット学の主な研究分野

現在のチベット学の重心は相変わらず仏教と仏典研究にある。中には東洋文庫のチベット仏教文献の出版や、仏典に関する梵蔵漢の索引の制作、チベット語文献を使った仏教思想の研究や、密教の研究、曼荼羅、タンカ、チベット音楽の研究、民間文学などの研究が含まれている。

社会、歴史研究では、日本入蔵者の記録の研究、チベット社会研究及び周辺各地との文化交流に対する研究、中国、モンゴル歴代王朝とチベットの関係史、敦煌のチベット語文献に基づく歴史研究、チベット及び周辺地域の寺院調査報告なので内容がある。

#### 4.2 日本チベット学の主な研究機構

仏教大学でチベット研究を展開している大学に、高野山大学、大谷大学、駒沢大学、龍谷大学、立正大学、大正大学、仏教大学がある。その他、一部の私立大学、例えば、早稲田大学、東洋大学、天理大学とその付属の研究所が大蔵経を主とするチベット語文献を収蔵しており、これらの文献を研究するために、チベット語の講座や課程も設けられている。国立大学、例えば東京大学、京都大学、東北大学、名古屋大学、九州大学、北海道大学、広島大学などにもチベットを研究する部門が設置されている。その他に、国際仏教学研究院の大学図書館、成田山仏教研究所などがある。

#### 4.3 日中チベット学研究交流の現状

日本のチベット学が芽生えから今まですぐれた業績をとってきた。それはしっかりとした文献収集と切り離せないと思われる。それだけでなく、目録と索引の制作にも力をいれ、これからの研究に多大な便利を提供した。それにアメリカや欧米諸国に留学生を送り、西洋の学术界と密接に交流を行い、自国のチベット学を充実させてきた。

日本のチベット学は資料が豊富で、文献の整理が整っているという長所がある。しかし、日本の

多くのチベット学研究者は中国のチベット自治区に入って実地調査を展開することができず、海外にいるチベット族の方だけを研究対象とするということとチベット学研究の分野がまだ狭いという短所もある。

今後、国際協力、特に中国の学者と協力することで、この状況の改善が期されることと思われる。現在、国際チベット学会や、中日学者チベットフォーラムなど、すでに一部の国際交流が行われている。さらに、日本の学者中根千枝が中国の学者と協力して、中国域内のチベット民族に対する研究を展開している。その他、星実千代はチベット族の方と手を携え、チベットの民間文学、民謡などの研究をしている。また、日本の民俗学者と中国の民俗学者が一緒になって、チベットの民間文学を世界に紹介するなどの動きも見られる。

## 5. 終わりに

日本のチベット学は19世紀末頃に芽生え、文献の収集と整理、専門研究の展開などの道を経て、豊かな成果を取りながら、この分野では世界の先頭に立つような高さにたどり着いてきた。これから、チベット学という分野でもっと豊かな成果を出すために、日中両国間の多様な協力と交流が望まれている。特に言語研究、民間文学、音楽や舞踊、タンカ、曼荼羅などチベット民族との直接交流を要する分野では、日本の優れた実地調査の方法プラス中国の資源で、今までと違う新たな成果を得ることが期待されている。

#### 参考文献

1. 山口瑞鳳『チベット上』東京大学出版会 1987年P.4
2. 桜井龍彦 李連榮 百年日本チベット学研究概況 中国チベット学 2006年
3. 川崎信定 チベット研究の状況と可能性 東方学 第百 2000年